

Title	信用リスク・ポートフォリオ管理に関する一考察 - 銀行の貸出資産に対して -
Sub Title	
Author	金元国(Kimu, Uongutsuku) 太田康信
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1999
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1999年度経営学 第1501号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001999-1501

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所属ゼミ	太田 研究会	学籍番号	89828291	氏名	金 元国
(論文題名)					
<h2>信用リスク・ポートフォリオ管理に関する一考察 —銀行の貸出資産に対して—</h2>					
(内容の要旨)					
<p>過去、銀行は規制の保護で安定的な収益が保証されてきた。すなわち、一定水準のマージンが確保されるように金利が規制される状況では預金増大が利益増大を意味した。しかし、日本と韓国の金融機関は金融自由化とともに国際化、開放化している。先進金融テクニカルを身につけた西欧金融機関との競争に迫られている。このような内外環境変化は銀行経営にも多くの変化を強要し、様々なリスクに耐えられるリスク計量と合理的なリスク管理が要求された。</p> <p>最近、デリバティブ管理に失敗し、倒産する金融機関が増えるにつれて、デリバティブリスク管理を中心に認識が高めてきた。しかし、デリバティブのリスク管理も大事であるが、より大切なのは貸出資産のリスク管理である。なぜならば、銀行資産の半分以上を貸出が占めており、銀行収益も半分以上を貸出利息が占めている。実際に北海道拓殖銀行や日本長期信用銀行のように大手都市銀行がバブル期に行なった不動産担保貸出の不良化によって姿を消した。そのため、本論文は銀行貸出資産の信用リスク・ポートフォリオ管理について考察し、マーコビッツの資産最適配分モデルを用いて、目標収益率を達成しながらリスクを最低に抑えるポートフォリオの算出を試みた。</p> <p>ポートフォリオ・リターン(期待収益率)とリスク(収益率の標準偏差)を算出するため、R&I社の格付け別の利回り及びデフォルトデータを用いることにした。貸出の表面利回りは公式 $E(R_i) = (1+r_f)\{1-E(D_i)+E(D_i) \times E(f_i)\} - 1$ により期待収益率に換えられた。そして、格付け別デフォルトデータを用いて、相関係数行列や共分散行列を算出した。</p> <p>これらの数字を用いて、銀行貸出資産の最適ポートフォリオを算出した。すなわち、マーコビッツの「平均一分散モデル」を用いて、Lagrange の未定乗数法を使って、各等級別資産の最適ポートフォリオを求めた。これで、ある目標収益率を達成しながらリスクを最低に抑えるポートフォリオができた。次に信用 VaR と貢献 VaR について考察し、求めた最適ポートフォリオの信用 VaR と貢献 VaR を計算した。続いて、目標収益率を変えながらシミュレーションし、資産の有効フロンティアを作成することができた。この資産有効フロンティアを用いて、あるリスクで最大の収益率が実現できるポートフォリオを算出することもできた。</p> <p>資産有効フロンティアは右上がり曲線でリターンとリスクは正の相関関係であることを表した。すなわち、リターンを求めてリスクを省みなければ経営破綻する可能性があり、リスクを恐れて安全な融資先ばかり求めてはリターンが確保できない。リスクの安定を優先するか、もしくは収益の拡大をより優先するかは銀行の経営政策上決める問題である。つまり、明確にした政策を前提にして銀行がとるリスク許容量を決め、そのリスクに対して十分な自己資本を用意すべきである。さらに、許容リスク範囲内で達成できる最大の収益率をもとめる資産配分を決めるのがポートフォリオの管理である。</p> <p>本論文はリターンとリスクとの関係を明確にし、銀行なりの政策うえで、最低リスクと最大リターンを求める最適ポートフォリオ算出モデルとしての提言であると言える。</p>					